

地域とつながる心



皆さんは子どもものころ、近所のおじさんやおばさんから褒められたり、叱られたりした経験はありますか。

ひと昔前は、他人の子でも悪いことをすれば注意をし、困ったことがあれば隣人同士で助け合うなど、隣近所が大きな家族のようでした。しかし、時代とともにそうした地域のつながりが薄れ、地域の教育力の低下や犯罪の増加が指摘されるようになっていきます。そこで今回は、地域に関心を持ち、地域とつながる心について考えます。

違う土地での 恩返し

「消防団に入ってくれないか」

ある町の肥料製造販売会社に勤める高岡宗太さん（25歳）は、同じ町で農業を営

む森直樹さん（35歳）から、地元の消防団に入ってほしいと頼まれました。

大学を卒業し、就職でこの地に移り住んだ宗太さんは、仕事に夢中で地域への関心は薄く、消防団の活動もよく知らなかったため、最初は断るつもりでした。

しかし、その話を聞いた会社の社長が、消防団に入っていた経験があり、「地域の人たちとのつながりができるし、視野も広がるから、無理のない範囲でおおい

にやったらいい」と勧められたことで、しぶしぶ入ることになりました。

*

それから二週間後の夜、仕事を終えた宗太さんは森さんに案内され、消防団の打ち合わせに出席しました。

消防団の人たちは、地元で商店や農家を営んでいる人が多く、宗太さんは最初、自分がよそ者のような気がしていました。しかし、気さくに話しかけてくれる地元の人たちの明るい雰囲気（きふい）に少しずつ心が和らぎ（なご）、時間とともに溶け込んでいくことができました。

翌週から、市内に約二十ある消防団が消火活動の技術やスピードを競う「消防操法大会」に向けての訓練が始まりました。毎晩、宗太さんは仕事を終えるると自





転車で近くの小学校に向かい、グランドでの訓練に参加します。最初は、慣れない動作や先輩の厳しい指導にな

かなかついていけず、消防団に入ったことを少し後悔しました。

それから一か月が過ぎた日の訓練中のことです。突然、消防団の消防車の無線に消防署から火事の連絡が入り、宗太さんたちを乗せた車はサイレンを鳴らしながら、火事場へと急行しました。

もくもくと煙が立ち昇る火事場に近づくとき、たくさんの人ばかりができています。すでに消防車が一台到着しています。消防署員が消火活動を始めていました。消防団の先輩たちは車を降りるやいなや、ホースや照明機材を持って消火活動の援護を始めました。てきばぎと行動する先輩の後ろで、宗太さんが何をしてよいかわからず戸惑っているとき、先輩の森さんから、「住民が火事場に近づかないように注意を促してくれ！」と指示を受けました。宗太さんは言われたとおりに道の間に「進入禁止」のテープを張り、集まった近隣の住民に「危ないので、ここから先には行かないでください！」と大声で注意を呼びかけました。

火事は、木材置き場での火の不始末が



原因だったようで、死傷者もなく三十分ほどで鎮火しました。しばらくすると、見物人の波も引き、消火活動を終えた消防署員と消防団の先輩たちが安堵の表情を浮かべ、機材を担いで宗太さんのいる消防車まで戻ってきました。

それまで消防団の訓練の意味が十分に理解できなかった宗太さんでしたが、実際の火事場での活動を体験し、地元の消防団が地域の暮らしに大きく貢献していることを知って、その一員であることを少し誇らしく思いました。

*

その後、宗太さんは火事場での経験を積み重ねる中で、先輩の後ろ姿から「自分の街は自分で守る」という地域に対する使命感や誇りを感じ、消防団活動の





意義を理解して訓練にも積極的に取り組むようになっていきました。

また、そうした気づきがかつかけとなり、消防団活動と同様、それまでは無関心だった地元の商店街についても、単なる店舗の集合体ではなく、実は多くの人の努力によって運営されていることを知り、疎遠に思っていた町の人たちが、少し身近な存在に感じられるようになりま

した。

宗太さんの実家は、田舎いなかの商店街で花屋を営んでいます。宗太さんは幼いころ、両親が商売で忙しく、兄と二人で家の裏にある神社の境内けいだいでよく遊んでいました。そこで毎日のように、近所のおじさんやおばさんから、「宗ちゃん、今日も元気だね」「遊ぶときは車に気をつけなさいよ」などと声をかけてもらっていたことを思い出していました。

「ここは生まれ育った土地ではないけれど、この町で生きている今、故郷で育ててもらった恩おんをこの土地で返していく。それが、幼いころにお世話になった田舎の人たちへの恩返しになるのではないか」。そう考え始めた宗太さんでした。



見直される「地域とのつながり」

内閣府が発行する平成十九年度の『国民生活白書』のテーマは、「つながりが築く豊かな国民生活」です。その中の柱の一つに、「地域のつながり」が取り上げられています。

『白書』では、「昔に比べて地域のつながりは希薄化している」と考える人が増えていることや、「地域のつながりを持ちたくても持てない人が相当程度いる」ことが報告されています。

また、「地域の人々とのつながりを持ちたくない」と考えている人はごく少数に過ぎず、「困った時には近隣の人々と助け合いたい」と考えている人が多いという

結果も出ています。

ここ数年、地域のつながりを見直す声が聞かれるようになった大きな原因の一つに、住環境の変化が挙げられます。特に都市部では、サラリーマン家族や核家族が急増し、交通網や情報通信の進歩などによって地域との関わりがなくなっても、家と会社の往復だけでの生活が容易になっていきます。

しかし、地域社会の人間関係が弱くなると、地域の一員としての意識が薄れて住民の心は離れ離れになり、私たちの住む町は、単なる住居の集合体でしかなくなってしまいます。それは地域の住民の

助け合いや協力が困難になるだけでなく、公共心が失われて地域のルールが守られなくなり、住民のマナーの悪化にもつながります。

住民の地域への関心度を示すものの一つに、町内の掲示板が挙げられます。期限の切れたポスターやチラシがいつまでも貼られている地域や集合住宅は、泥棒に狙われやすく、犯罪発生率も高いという指摘があるほどです。

これは見方を変えれば、「住民と住民との心の間に隙間が生じている」とも言えます。こうした「心の隙間」を埋めるために、お隣やご近所同士が交流を深め、地域の活動に関心を持つことは、犯罪発生の予防になるだけでなく、地域の子どもたちを見守り育てるといって、教育面で



の効果にもつながるのです。

特に近年は、安心・安全な町づくりが注目されています。この背景には、平成



七年一月に起きた阪神・淡路大震災や十六年十月の新潟県中越地震の教訓があるようです。実際、この二つの大地震のときには、日ごろの地域住民のつながりが大きな力を発揮し、救援活動が本格化する前に、ご近所の人たちの協力によって多くの人命が救われました。また、避難所でも、全国から駆けつけたボランティアの援助とともに、地域の人々の助け合いや労わり合いの心が被災者同士の生きる力になった、という報告もあります。

前述の『白書』では、ふだんから隣近所との行き来がある人は、精神的なやすらぎを得ている傾向があるとの報告もあり、地域のつながりと安心・安全な生活は切っても切れない関係にあると言えるでしょう。

「地育力」を 高める

最近、地域のつながりを「地域力」と表現したり、地域で育て合う力という意味で「地育力」という言葉が生まれつつあります。

麗澤大学の水野治太郎教授は、地域のつながりに注目し、地域力の再生に力を尽くしている人の一人です。水野氏は、ある講演で、隣近所に住んでいても挨拶すらしない人間関係が増えている現状を「地域力」や「地育力」の衰退と捉え、

次のような提言をしています。

*

私がお願いしたいのは、ぜひ、「井戸端会議」を復活させてほしいということです。地域がバラバラになった理由の一つは、主婦が井戸端会議をやめたことだと思います。それは主婦だけの責任ではないのですが、家の外に出て、近所の人がお互いに立ち話をするのが、どんなに地域の力を誇示しているかということ、あらためて見直していただきたいのです。おしゃべりや立ち話は、むだなことではありません。そこに人がいるということ、そして隣同士がつながっているということ、怪しげな人を遠ざけることにもなります。ですから、声かけ運動や井戸端会議をおおいにやってください。

そうやって心を少しずつ地域に向けていくことが、「地育力」の向上につながるのです。

*

このように住民同士の心の隙間を埋め、心のつながりを広げていくためのヒントは、身近なところにもたくさんあります。

地域に目を向け、隣人に対して心を開きつつかけは、やはり挨拶や声かけでしょう。「おはようございます」「こんにちは」といった簡単な挨拶から始め、何度か挨拶を交わすうちに、「いいお天気ですね」「お元気ですか」といったひと言を付け加えられるようになることで、心の通い合う人間関係を築いていくきっかけが生まれ、水野氏の提唱する井戸端会議も自然と増えていくことでしよう。





また、最寄り駅やスーパーマーケットに行く道すがら、小さな袋を持ってゴミを拾って歩いたり、子どもたちが登下校をする時間に散歩をしたりすることも、地域への愛着をはぐくみ、安心・安全な町づくりへの貢献につながる一歩です。

*

ここで、地域の美観や歴史に関心を持ったことがきっかけで、地域とのつながりづくりに取り組んでいる方の事例をご紹介します。

山形県東根市にある六田地区は、昔から紅花の産地で、江戸時代は羽州街道の宿場町として栄え、俳人の松尾芭蕉も通ったと言われる地域です。

市内に住む齊藤文四郎さん(62歳)は、地元の郷土史を読み、紅花とともに生き

た先人たちの苦勞や喜びを知ったことから、地域である活動を始めました。それは、「紅花」をテーマに、郷土の歴史や魅力を発信し、住民に再認識してもらおうというものです。

その一つが、芭蕉が訪れたころの風情を蘇らせようと、家々に紅花の種を配り、庭先で育ててもらったことでした。齊藤さんは、紅花を愛でることで郷土に愛着を持つてもらい、地元の良さに目を向けてもらおうと思ったのです。

齊藤さんは、「最初は地域の人たちの協力が得られるかどうか不安だった」と言います。しかし、齊藤さんの呼びかけに地域の人も喜んで応じ、最初の年は約四十戸、翌年は約五十戸の家庭がそれぞれ庭先で紅花の種を植え、育ててく



れるようになりました。その結果、今では初夏になると町のいたる所で紅花が黄色く咲き誇り、どこの家でも紅花のことで茶飲み話ができるほどになって、地域の人々の交流も深まっていると言います。

齊藤さんは、この活動の動機について、「今の私たちの生活があるのも、先人たちのおかげです。六田の歴史を子や孫たちに伝え、ここに生まれてよかったと思ってもらいたかった」と話しています。

（『れいろう』平成十七年十一月号モラロジー
研究所刊）。

*

このように、私たちが住む町の現在だ

けを見るのではなく、町の発展に尽力さ
れた先人や先輩の恩恵に目を向けること
も、地域を愛し、地域につながる心をは
ぐくんでいくことになります。

「つながり」の再構築に向けて

かつての日本の地域社会では、自分の
子であるなしに関わらず、悪いことをす
れば大人たちは必ず注意をし、危険がな

いように見守るといいう、地域の連帯感や
教育力がありました。

こうした地域の人たちのつながりを再
び取り戻す基本的な解決策は、隣人同士
のつながりの回復以外にありません。個
人や自分の家族だけが幸せであればよい
といった狭い考えから一歩抜け出し、「地
域の人たちとともに安心して暮らせる社





会をつくる」という意識を培うことが求められています。

そのためには、地域の人の顔が見えて安心できる、お互いに助け合える社会をつくることです。まず、朝夕の挨拶や声かけ、清掃といった身近にできることを行ってみませんか。このような行為を積み重ねることによって、人と人との「つながり」は必ず生まれてくるものです。それが地域の子どもたちを見守り、育てることもつながっていくのではないのでしょうか。

さらに、地域への愛着や関心を自分の町だけにとどめるのではなく、より大きな市町村や都道府県へと広げていくことで、人の心が通い合う社会づくりや国づくりにつなげていきたいものです。